

バイオテクノロジーとニューライト

——米国新保守主義の赤の脅威——

ジョナサン・D・モレノ

(米国進歩センター)

サム・バーガー

(米国進歩センター)

はじめに

新保守主義のバイオテクノロジー批判には亡霊がとりついている——マルクス主義という亡霊である¹。

米国の保守主義を席捲するに至った新保守主義運動だが、この運動は、かつてのマルクス主義左派から生まれたものである。若い頃に共産主義者だった新保守主義

(neoconservatism) の創始者たちは、歴史の主要な原動力は経済の力ではなく道徳的諸価値であると論じることによって、マルクス主義の教義を反転させた。しかし、新保守主義のバイオテクノロジー批判には、現在でもカール・マルクス (Karl Marx) の影響が色濃く残っており、また、スコットランドの哲学者・政治経済学者アダム・スミス (Adam Smith) よりもドイツの哲学者マルティン・ハイデガー (Martin Heidegger) に大きく依拠している。

新保守主義者の第一世代はその出自を強く意識していたが、現世代は自らの思想的ルーツについての自覚を失ってきているように見える。通常は米国の保守主義の中の一つだと考えられているが、現在の新保守主義が用いている概念範疇は保守主義以上に急進的であり、道徳的諸価値をより重視している。新保守主義のバイオテクノロジー批判者は、市場や、市場と結びついたテクノロジーのイノベーション (革新) の正当性を認めるどころか、市場主導のイノベーションに対して不信の念を抱き続けている。というのも、それがもたらす道徳的影響を強く危惧しているからである。

新保守主義のテクノロジー批判はマルクス主義とハイデガーの実存主義をルーツとしている。新保守主義者たちはこうした出自を認めたがらない——あるいは、おそらく自覚がない——のであり、そうした思想的基盤をもっていること、そしてそれがどのような含意をもつかということを認識しない。それゆえ、結局のところ彼らの批判には一貫性がなく、また内部に矛盾すら抱えている。新保守主義者たちは自らの思想的ルーツを認識し受け入れることをしないがゆえに、バイオテクノロジーやそれを生み出した社会に対して非常にアンビヴァレントで、しばしば混乱した見解を抱き続けているのである。

共産主義の灰からよみがえる

米国の新保守主義の起源は、アーヴィング・クリストル (Irving Kristol) やノーマン・

ポドレツ（Norman Podhoretz）など、幻滅を経験した世代のマルクス主義者にさかのぼる。かつては多くの新保守主義者たちが、経済の力は文化という上部構造を規定する下部構造であるとする『資本論（*Das Kapital*）』のマルクスを受け入れていた。「物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、逆に彼らの社会的存在が彼らの意識を規定する」（Marx 1859 [1977], 20–21）²というのである。マルクスにとっては、経済的唯物論が道徳的諸価値を規定するのである。

しかしヨシフ・スターリン（Josef Stalin）や毛沢東といった共産主義指導者の犯した犯罪は、クリストルやポドレツらが若い頃のマルクス主義的唯物論から離れるきっかけとなった。これらの指導者たちによる何百万人もの同胞の殺戮により、新保守主義者たちは道徳の譲歩不可能な重要性を確信し、マルクスの分析を覆すことになったのである。歴史の真の原動力であり、経済的取り決めの原動力とさえなっているのは、道徳的諸価値といういわゆる上部構造であると新保守主義者たちは主張するようになった。

新保守主義者たちは、これらの道徳的諸価値は不変の人間性に根差したものであり、社会政策や政府の決定によって変更できるものではないことが共産主義の失敗によって示されたと考えた。「間違いなく明らかなことは」、クリストルに言わせるなら、「社会主義が現代人の気質にはまったく不向きであるとわかってしまったことである」（Kristol 1968, 516）。フランシス・フクヤマ（Francis Fukuyama）は当時、新保守主義者であり大統領生命倫理評議会（President's Council on Bioethics）のメンバーでもあったが、この点を支持して次のように記している。「ユートピアを建設しようとする人々の思い通りにはさせない人間性という浅瀬で…社会主義は座礁してしまった」（Fukuyama 2002a, 80）。そのかわりに、新保守主義者たちは米国の第二次世界大戦の世代の成功を称賛し、それを人間性と道徳という静的な概念を土台とする開かれた米国社会の、欠くことのできない道徳的卓越性の証左であるとみなした。

しかし新保守主義者たちによるマルクス主義の反転は、実際はマルクスの初期の著作物によるところが大きい。新保守主義を創設した世代は、『パーティザンレビュー（*Partisan Review*）』誌のような雑誌と特に関係が深いが、デイヴィッド・リカード（David Ricardo）のような古典的経済学者たちの影響下で著作を行った「後期マルクス」より1844年の『経済学・哲学草稿（*Economic and Philosophical Manuscripts of 1844*）』の「初期マルクス」の懸念に実際には共感していたのである。初期マルクスは資本主義が人間性と人間関係を腐食する力を懸念し、「貨幣は人々の間の仲介を外化し、そうしてそれを彼らから疎外してしまう」と主張していた（Marx 1844）。彼が資本主義と結びつけて考えていた疎外（alienation）と商品化（commodification）の問題、すなわち、いくらか変化した形であれば新保守主義のバイオテクノロジー批判の中で影響力をもつことになる諸観念をマルクスは懸念していた。

マルクスの考えの影響は、右派と左派双方の著述家の間に浸透していた。フランクフルト学派の批判理論家、構造主義者、ポスト構造主義者、および社会主義フェミニストを含む一連の思想的運動は、第一世代の新保守主義者たちがしたようにこれらの諸概念を用いてきた。だが、バイオテクノロジーに取り組むクリストルとポドレツの思想的な末裔たちは、彼らが思想的な左派から恩恵を受けていることについてある種の健忘を呈している。

彼らの哲学的基盤を無視しているために、新保守主義の生命倫理学者たちは、資本主義、普遍的諸価値、そして最終的にバイオテクノロジーに対して彼らの考えがもつ含意を十分に受け入れることができないままなのである。

バイオテクノロジーがもたらす暗黒の未来

第二世代の新保守主義思想家たちが抱く外交における影響力の強い理想主義は我々に周知のものとなっている。民主主義的な道德のヴィジョンと民族的あるいは国家的な境界のない人類の普遍的権利を前進させるために、アメリカがそのハードパワーを用いる必要があるという確信である。我々がイラクで「解放者として歓迎される」であろうという主張には、根本的な人間性に対する新保守主義の信念が反映されている。いったん専制的な政府から解放されれば、人々は統治や道德に対する西洋的な考えを採用するであろうと新保守主義者たちは想定していた。しかしブッシュ政権によるイラクでの戦争に対する疑念により、国際情勢の中ではこうした道德的理想主義に限界があることに、世界の注目が集まった。

その一方で、新保守主義者たちによるバイオテクノロジーの批判、すなわち反ユートピア（ディストピア）的な遠い未来に対するはるかにより悲観的な懸念は比較的注目されてこなかった。マルクスが資本主義に反対して行った議論をよりハイデガー的な懸念であるテクノロジー批判へとねじれさせることで、テクノロジーが人間社会を腐食する影響を新保守主義者たちは懸念する。科学のイノベーションに対して、またときには人間の幸福に対して科学それ自体がもつ含意についてさえも、彼らは非常にアンビヴァレントな態度を示している。彼らがおそれているのは、テクノロジーが人間を商品化し、自分自身から疎外するということであり、より重要な諸価値がテクノロジーについての展望によって曖昧にされてしまうことを懸念している。アダム・ウルフソン（Adam Wolfson）がバイオテクノロジーに対するこうした新保守主義の考え方を次のように表現している。

まず、バイオテクノロジーが特定の方向に発展を続けていくことで、真に基礎的な道德的制限が必然的に侵害されるであろうということである。第二に、バイオテクノロジーによって、家族、子育て、世代間の関係、仕事、業績やそれ以外の人間の生活の多くの領域に対する我々の考え方に革命が始まるであろうということである。そして第三に、バイオテクノロジーにより人類の歴史に根本的な断絶が生じ、我々が「人間以後（posthuman）」の時代に入る可能性があるということである（Wolfson 2003, 55）。

新保守主義者たちは進歩の可能性に疑いを抱いているため、バイオテクノロジーによってもたらされる変化を懸念している。世界を変えようと試みて失敗したという傷を彼ら自身負っているため、「進歩は必ずしもよいものではない」のであり、むしろ「予測不可能であって信頼できない」と論じるガートルード・ヒメルファーフ（Gertrude Himmelfarb）のような新保守主義者もいる（Himmelfarb 2002, 75–76）。そのような新保守主義者たちの考えによれば、バイオテクノロジーの支持者たちは、共産主義者たちがよりよい社会を作り出せると考えて50年前に犯したのと同じ誤りを犯しているということになる。新保守

主義の雑誌『ニューアトランティス (*The New Atlantis*)』の編集者であったエリック・コーエン (Eric Cohen) とウィリアム・クリストル (William Kristol) は明らかにマルクス主義者との比較を行っている。彼らは次のように論じる。バイオテクノロジーの支持者たちは「自然を超えて人類を導こうとする医学研究者の傲慢さと、寛容で公正で自由な天国を地上に建設するという人類の新たな希望を遺伝学において追い求める共産主義後の空想家の感傷との奇妙な混合をすっかり」呈している (Cohen and Kristol 2002, 300)。

しかしながら、このような希望は新保守主義者たちにとっては完全に見当違いである。進歩は難しい。なぜなら人間はあまりに不完全であるからだ。社会主義の失敗は、外的な強制力がなければ我々は公正かつ平等に共生することができないことの証左であると新保守主義者たちは考える。『文明とその不満 (*Civilization and its Discontents*)』のジークムント・フロイト (Sigmund Freud) を想起させる文章の中でアーヴィング・クリストルが嘆くように、「社会主義的な平等と友愛の中で人々が十全で満足した生を送るのに十分な富が存在する——彼らがそうすることを欲しささえすれば」。だが彼らはそのようなことを望まない。彼らはより多くを望むのである」 (Kristol 1968, 517)。

それゆえ、バイオテクノロジーを用いて我々の生活の質を改善しようとするより、単に我々が誤りを犯す能力を制限することを新保守主義者たちは主張する。人々がある種の重要な決定を行うのを我々は信用することができない。というのは、人間はあまりに不完全、不道德で、弱いからである。新保守主義者たちにとっては、一般的に進歩や個人の能力と結びつけられる資本主義でさえ、人間の弱さに根差したものである。「資本主義を道徳的に擁護する議論は、人間の知恵と徳が有限であるという信念にかつては堅く基づいていた」

(Cohen 2002, 26) とコーエンは主張する。新保守主義者たちの信念によれば、我々はバイオテクノロジーに対するこうした人間の弱さをも認識しなければならないのであり、バイオテクノロジーを用いて何かを変えてしまう人間の能力を限定しなければならないとされる。

進歩と人間の能力に対するこうした悲観主義は、バイオテクノロジーに対する新保守主義の懸念に広くみられるものであり、起こる証拠のほとんどない終末論的な未来にしばしば焦点を合わせている。新保守主義者たちはマルクス主義を反転させる際に、よりよい未来と人間の潜在能力に対するマルクスの確信を放棄した。そのかわりに、長年にわたる人間的諸価値をテクノロジーが侵害するにつれて絶え間なく悪化していると彼らがみなす世界を分析するために、彼らはマルクス主義の諸概念を用いている。新保守主義者であり大統領生命倫理評議会の座長であったレオン・カス (Leon Kass) は、愛する孫たちの今後の人生について論じる際におそらくこうした気分を最もよく表現していた。「現代社会が彼らに与えるものを、その奴隷となることなく享受できる場所を彼らには見つけてもらいたい。しかしながら、私の人生を彼らと交換することはしないだろう」 (Kass 2006, 15)。

疎外と所有

バイオテクノロジーに対する新保守主義の批判では、マルクスの「疎外」概念が用いられるが、この概念はほぼ正反対にまで歪められている。マルクスにとって「疎外」とは、人間が自己の労働や生産物、さらには他者からも遠ざけられることである。「労働者の生

産物は、彼の需要や地位と直接的な関係になく、いずれの方向にもその労働者にとっては外的な社会的な組み合わせによってむしろ規定されるのである」(Marx 1844 [1967], 275)。労働者の生産物は、貨幣または売却される財として外化され、個人の創造性や欲求の表現とは対極にある単なる物にまで還元される。資本主義においては、人間の努力により生み出されるあらゆる生産物は、ひいては人間自身でさえも、市場価値という観点から評価されるが、疎外とはこうした資本主義の構造的問題がもたらす直接的な結果なのである。

新保守主義者たちはまた、人間が自らの労働、他者、そして自分自身から遠ざけられていくことにも懸念を示している。だが、マルクスが疎外を資本主義の影響と解釈したのに対し、新保守主義者たちは、テクノロジーの使用を規定する経済構造でなく、テクノロジーが疎外を引き起こすのだと主張する。そのため、体外受精や他の生殖補助技術は、人類を生殖行為から遠ざけ、我が子が同類の人間であるという認識から遠ざける、すなわち、こうしたテクノロジーが「子どもは自分たちの意思の生産物に過ぎないと考えようになる」ことを我々に強いるのであると批判される (Wolfson 2003, 59)。このテーマは、コーエンがキリスト教倫理学者ポール・ラムジー (Paul Ramsey) を引用する中で明らかになっている。「際立って人間的なものである子育てを超越することは、不可避免にはるか下方へと——テクノロジーによる広範囲にわたる人間の疎外へと——転落することである」 (Cohen 2002, 24)。

ポール・セラ (Paul Cella III) は『ニューアトランティス』誌の中で、テクノロジーによる疎外の危険性に関してさらに広範な主張を展開している。資本主義社会では、テクノロジーから生まれた繁栄は、我々を「甘やかす」のがふつうであり、労働に内在する困難や犠牲についての我々の理解を限定してしまう。「テクノロジーの背後にある人間的なものの低減あるいは貧困化に危険が潜んでいる。…最も洗練された技術とテクノロジーを手にした現代人は人間の労働の尊厳を真に理解することはないだろう。…こうした疎外は部分的には、我々が一方で事物の原因から、他方ではその影響から離れていることにある」 (Cella 2005, 58)。セラにとっては、人間の労働の尊厳は「その労働者にとっては外的な社会的な組み合わせ」によってではなく、テクノロジーによってもたらされる労働の容易さおよびそよそしさによって破壊されるのである。

セラは、テクノロジーのこうした否定的影響は蔓延しており、医師患者関係にさえ影響を与えていると示唆している。

人間的性格が薄れるにつれて、ある種の疎外が両者につきまとう。医師の職務は、人格的な交流とケアから、現代医学の巨大なテクノロジーの体制と患者との間の非人格的な連絡係へとその形を変える。医師はいつの日か、自分が治療者であるよりむしろ官僚的な仲介者であることに気付く (Cella 2005, 59)。

セラが用いる語句は、フリードリヒ・エンゲルス (Friedrich Engels) とマルクスが『共産党宣言 (Communist Manifesto)』で用いるものと酷似している。同書の中で彼らは、疎外は至る所に蔓延しているために知識階級にも影響を与えているとして疎外を非難している。「ブルジョアジーは、これまで尊敬され、深い畏敬の念をもって仰ぎ見られていたあらゆる職業からその光背を剥ぎとった。ブルジョアジーは、医師、法律家、聖職者、詩

人、学者を、自分が雇った賃金労働者に変えた」(Engels and Marx 1848 [1978], 476)。フリードリヒ・ニーチェ (Friedrich Nietzsche)、エミール・デュルケーム (Emile Durkheim) やフロイトから、ボブ・ディラン (Bob Dylan) ³そしてセックス・ピストルズ (The Sex Pistols) ⁴に至るまでの150年間、労働とその生産物の関係性よりも効率性が重視されるようになるにつれ、疎外は、工業化社会と脱工業化社会の観察者の間で共通のテーマであり続けた。保険維持機構のセラの担当医も、組立ラインの労働者と同じように危険にさらされているのである。

おそらくより驚くべきこととしては、独占資本主義が疎外の一因となるという点でもセラとマルクスは意見が一致する。「自由企業制度の下での企業規模の重要性」を認めながらも、セラはそれでもなお「巨大な官僚的企業に小規模の自律的な企業が無慈悲にのみ込まれる状況においては自由がどのように最もよく保たれるというのか理解できない」とする (Cella 2005, 61)。しかしセラはこうした独占を生じさせる資本主義の制度の構造的な問題に焦点を合わせることができない。彼はマルクスの結論を完全に反転させ、私的所有こそが疎外に対抗する鍵であると主張する。その理由は、私的所有は「正直な労働の信用の上に購入されるものであり、我々が成し遂げることは何であれ究極的には人間的なものであることを常に思い出させてくれる」(Cella 2005, 62) からである。所有が生に意味を与えるのである。

テクノロジーが使用される経済的・政治的な諸条件よりもテクノロジーに焦点を合わせることが、新保守主義の著作物に典型的にみられる問題である。そのような分析は、経済を道徳の単なる一つの関数としかみなさない新保守主義者にとってみれば奇妙なものであろう。この問題についてのセラ自身による論評がわかりやすい。「経済に我々の諸原則を規定させるのはまさに向きが逆である。なぜなら、経済は道具であるからだ」(Cella 2005, 61-62)。人生の形を規定するのは、非人格的な経済ではなく、人間性と道徳なのである。

大統領生命倫理評議会は一般的には新保守主義のメンバーとスタッフによって思想的に牛耳られていると考えられているが、この大統領生命倫理評議会による2003年の報告書である『治療を超えて (*Beyond Therapy*)』から、テクノロジーによって引き起こされる疎外に対する非難を検討することにしよう。この報告書は、急進的なマルクス主義者の信条のように読める。

大切なのは、単なるアウトプットを生み出すインプットとしてではなく、我々が人間として、また人間らしく、目標として立てた結果を生み出したかどうかということである。…とにかく何らかの方法で労働者を、あるいは自分たち自身をさらに働かせるということだけが問題なのであれば、手に入る限りのバイオテクノロジー的操作を使って活動能力向上を目指すのは、それはそれで筋の通ったことである。…大切なのは、活動主体や生産主体としての我々すべてを尊重するようなかたちで、すなわち、確かに可能な限り最高の活動を求めはするけれども、動物や機械としてではなく人間としての最高の活動を求めて、自分の仕事をし、仕事仲間にも接するということである (President's Council on Bioethics 2003, 153) ⁵。

こうした強い調子の言葉が用いられているものの、報告書は、この疎外の構造的な原因を

検討していない。ブランドン・カーム (Brandon Keim) ⁶が『治療を超えて』に対する書評の中で書いたように、「バイオテクノロジーの技術が登場してくる政治的・経済的環境が、バイオテクノロジーの技術それ自体と同程度に徹底的に批判されるべきであるというのは至極当然のように思われる。しかし、何らかの提言が示されることは決してない」

(Keim 2004, 10)。新保守主義者たちは、疎外が人格を奪うという影響にとりつかれているが、根底にある社会と経済の力学ではなく近因に焦点を合わせているために彼らの分析は不完全なものとなっている。このように市場主導型の経済が人間に対してもつ影響に対して注意が向けられていないことは、新保守主義のバイオテクノロジー批判の内部での緊張関係を考慮するなら理解可能である。

身体を商品化する

新保守主義の生命倫理学者たちはまた、マルクス主義的な商品化の概念を用いてバイオテクノロジーを攻撃している。マルクスは、あらゆる人間関係、自分自身の身体や他者の身体との関係までもが資本主義によって否応なしに金銭的な関係に変換されてしまうと考えていた。『共産党宣言』では、資本主義が、現金勘定を無情に用いることで⁷、人々をそれぞれの場所にとどめていた「生まれながらの優位性」という従来の概念に取ってかわったと論じられている。人間の生活のいかなる部門もこうした変化から逃れられず、「聖なる家族」さえも例外ではない。「ブルジョアジーは、家族からその感情的なヴェールをはぎとって、家族関係を単なる金銭的な関係へと還元した」(Engels and Marx 1848 [1978], 476) とされる。誰もがさらなる資本の源とみなされる。

新保守主義者たちは商品化が人間社会に及ぼす影響について等しく強い懸念を表明している。しかし新保守主義者たちにとってその根本的原因は、またもや新たなバイオテクノロジーの技術であり、特に生殖技術である。コーエンは、「現代の経済において最も目を引くのは、目を見張るような新たなバイオテクノロジーの技術や生物学的手法の数々を含む身体の商品取引であり、それは我々の生まれついた生物学的あり方を改善し、制御し、操作すると約束する」(Cohen 2006a, 9) と警告している。「(クローニングにより) 人間の生の商品化は止めようがなくなるだろう」(Kass 2002, 230) とカスは主張する。研究室の科学者だけでなく個人によっても生殖に対してより大きな支配が及ぼせるようになることで、「人間の生殖が製造業と同様の様相を呈し、親たちは自分たちが「賢い買い物客」であると考えようになるだろう」(Wolfson 2003, 59) ことを新保守主義者たちはおそれている。これは商品化の究極の形態である。

同様に、人間と身体の間わり方や身体自体についてのリベラルな社会科学的分析で、商品化の概念を前提していないものはほとんど見当たらない。人類学の学術誌においてレズリー・シャープ (Lesley Sharp) は、バイオテクノロジーの技術を評価するためにマルクスやその他の左派の理論家たちを引き合いに出しているが、バイオテクノロジーが「臨床分野および関連する科学の諸分野へ応用されることによって、商品化され、断片化された身体の人類的な理解にパラダイムシフトがもたらされる」(Sharp 2000, 287) としている。そのような例としては、「生殖技術、臓器移植、美容整形手術、性転換手術、遺伝学および免疫学、そして最後にサイボーグの分野」(Sharp 2000, 287) が挙げられてい

る。

しかし、一見したところでは新保守主義と急進的左派のバイオテクノロジーに対する懸念は同一に見えるが、新保守主義者たちが根底にある社会経済の力に取り組むことを明らかに避けているので両者は最終的には分かれる。新保守主義者たちは、テクノロジーが用いられる状況ではなく、テクノロジーそのものに焦点を合わせている。例えば、コーエンの「身体の新たな商取引」(Cohen 2006a, 10)の議論を検討することにしよう。彼は、とりわけ有償での卵子の「提供」、勃起不全治療薬の市場、ヒト胚が「幹細胞の供給源として当たり前のように摘出される——有益な医療用商品となり…そして、おそらくは「商品交換」に基づいてさえ——他のどのような商品とも同じようにそうした胚が市場で疑いなく取引されるようになる」(Cohen 2006a, 22)未来を精査することで、商品化の問題に取り組んでいる。あらゆるものに価格を設定して販売することを可能にする経済システムが、部分的にはこれらの問題の原因となっているとも考えられるだろう。コーエンは、この猛烈な商品化を資本主義のせいにするかわりに、「人類に課せられた制約は克服されなければならない、タブーは呪われたものであり、人類の不名誉など幻想に過ぎない」とする1960年代のカウンターカルチャーとバイオテクノロジーの支持者たちによって共有された信念の所産であると主張している(Cohen 2006a, 15)。資本主義はなされるべきでないことがなされることを許容するが、謙虚さ(humility)によってそうした問題は抑制されている。コーエンにとっては、新保守主義の思想家たちにとって一般的にそうであるように、問題の真の原動力は道德であって経済ではない。

それに対し、大きく異なる哲学的枠組みから議論を展開すると考えられうる生命倫理学者は最近次のように論じた。

後期資本主義の影響の一つはほぼあらゆるものの商品化であるが、これは、マルクス主義的図式を援用するならば、自然と製造の領域の間の大きな障壁を打ち破ることである。卵子の抽出や「代理」母での女性による「分娩(labour)」は、価値あるものを作り出す「労働(labour)」である、とみなされるかもしれない。しかしこのことは、先進国か発展途上国かを問わず、事実上あらゆるものを商品化することによって女性が恩恵を受けるということを必ずしも意味するわけではない。とりわけ今後ますます治療的クローニングに必要な卵子のドナーが先進諸国で不足していることを考慮するなら、新たに発展している幹細胞を用いるバイオテクノロジーの技術では、その逆になる可能性が高い(Dickenson 2002, 55)。

しかしながら新保守主義者たちは、資本主義の制度的な問題に取り組むことができない。彼らは資本主義に深く敬服し、社会主義の道徳的影響を忌み嫌っており、また、より市場志向の伝統的な保守主義者たちと公然と分裂する可能性があるのを嫌がっている。それゆえ、ニューライトの生命倫理学者たちは、人間性を劣化させるバイオテクノロジーの技術を資本主義がいかに刺激し支えているかに対して危惧を抱き、そのために彼らの著作物の中には根深いアンビヴァレントな態度がしばしば現れる。セラによると、「最初は徳によって繁栄がもたらされるのだが、繁栄によって逆説的にも人間の徳は弱体化する」(Cella 2005, 58)。コーエンは我々に(そしておそらく自分自身にも)念を押して次のように指摘

する。「無論、ほとんどのバイオテクノロジーは称賛に値する。それは我々が久しく知っているとおりのブルジョアの進歩の継続である…」(Cohen 2006a, 18)。コーエンはこうも付け加える。「しかし同時に、現代の商取引、とりわけ身体の資本主義はしばしば不道德な(amoral)問題であるという事実を我々は直視しなければならない」(Cohen 2006a, 23)。

疎外の現象学

疎外と商品化の原因となっているのは資本主義ではなくテクノロジーであるとする新保守主義の懸念は、マルクス主義をハイデガーの哲学と混合した世界観に由来する。ハイデガーの議論によると、世界の中に意味を見出す方法には、科学、芸術、宗教など多くのものがある。しかし、そのどれ一つをとってみても、真理の全体を明らかにするものではない。むしろその逆である。これらの人間活動は、世界の一部の側面を明らかにすることで、それ以外の側面を隠蔽してしまう。

ハイデガーにとってとりわけ問題であったのはテクノロジー的世界観(技術的世界観)である。なぜなら、世界を操作の対象とするときには、そのことによって、この世界観自体が数多く存在する物事の見方のうちの一つにすぎないという事実が見えにくくなってしまふからである。科学とテクノロジーはあらゆる物事を説明しようとし、他の説明手段の余地を残さない。科学に従って「用立て(ordering)においてあらゆる開蔵(revealing)が費やされるという可能性によって、テクノロジーは開蔵を脅かす」(Heidegger 1954 [1977], 33)⁸。人は科学こそが真理を表現する唯一の手段であると思い込むようになり、そのことによって他の手段を排除してしまう。

テクノロジーと科学は、これらが世界に対する人為的なアプローチであるという点で、さらなる問題をも引き起こすとハイデガーは考えていた。世界内の諸物は、それぞれ特定の目的のために使用されるべき物とみなされる。人間が自然を使用の対象とするということは、その使い方がどれだけ無害なものに見えたとしても、常に、人間が好きなように使用するための単なる「在庫(standing-reserve)⁹」として世界を扱うことなのである。デイヴィッド・タバチュニク¹⁰(David Tabachnick)が説明するように、「テクノロジーは、植物にも、人間にも、文化にも、さらには戦争にも、それぞれ所与の本性または本質があるということを認めず、すべての物事を、操作されるべき「もの」として扱う」(Tabachnick 2005, 36)。

ハイデガーは、テクノロジー的世界観とはすなわち、自然が、征服されるべき対象、人間の目的のために使用されるべき対象とされる世界観だと考えた。この世界観はそれゆえ、さらなる征服を試みることにつながり、最終的には人間の尊厳に対する侵害にまで至るだろうと彼は考えていた。おそらく彼が最も詳細にテクノロジーを非難した箇所ではハイデガーはこのように主張した。「農業は今日では動力化された食品工業であり、ガス室と絶滅収容所での死体の製造、経済封鎖と国家の兵糧攻め¹¹、水素爆弾の製造とその本質において異なるところがない」(Tabachnick 2005, 36)。

テクノロジーが危険な世界観であるというハイデガー的な批判は、新保守主義者たちによるバイオテクノロジー批判において中心的なものである。不妊治療(Kass 1971)、臓器移植(Kass 1992)、そして無論ヒトクローン作成(Kass 1993)に対して長きにわたり危

惧を表明してきたカスはハンス・ヨナス（Hans Jonas）から影響を強く受けたが、そのヨナスはハイデガーから影響を受けた。カスの著作物に特徴的なのは、テクノロジーを用いる介入手段が人間の尊厳に対して提起する脅威に対する懸念だが、テクノロジー一般が人間存在のまさに核心から我々を疎外する傾向があるというさらに深い考えにも満たされている。疎外に対するセラの懸念に立ちかえり、カスは次のように主張する。「いわゆる経験的自然科学は、実際に経験されている通り、装置、測定機器、ポインターの読み取りと数字といったものに高度に作り込まれた仕方で邂逅することである。本来の自然は事実上決して直接的に出会われることはない」（Kass 1993, 7）。カスにとってさらに悪いことには、「現代の科学は、方法を適用することによって答えられない問いを、無意味あるいは無用であるとして拒絶する」（Kass 1993, 8）。新保守主義者たちが歴史の原動力とみなす道德の問題を、科学は考慮しない。

相当程度にハイデガー的な思想をもつ主要な新保守主義のバイオテクノロジー批判者はカス一人にとどまらない。フクヤマは、彼の著書『人間以後の未来（*Our Posthuman Future*）』第1章のエピグラムでハイデガーを引用する。

第一に人間に対する脅威は、致死的でありうるテクノロジーの機械や装置によるものではない。実際の脅威は常に人間の本質に対するものであった。より根源的な開蔵へ参入することが拒まれ、それゆえに、より原初的な真理の呼び声を経験することが拒まれるかもしれないという可能性によって、集立（*Gestell*）の支配が人間を脅かすのである（Fukuyama 2002b, 3）¹²。

コーエンもハイデガー的な傾向を示し、「現代社会の大きな欠陥の一つは、治療を求めること（あるいは「テクノロジーによる治療」）が我々の最重要の目的となり、十全な人生を生きるのに中心的である知恵、愛、卓越性、聖性の探求を締め出してしまうことだ」と嘆いている（Cohen 2003, 4）。新保守主義者たちは単に特定のテクノロジーのイノベーションに懸念を抱いているのではなく、全体としてのテクノロジーの進歩の性質に対して懸念を抱いているのである。

工業化された農業をガス室に結び付ける哲学的命題を受け入れることは、それがどれほど議論を喚起することを意図したものであろうと、それを是認する者に対して重い負担を負わせることになる。カス自身も、カスの影響を明らかに受けた若手の著述家たちも——カスの見解が義務的に言及されるのは『ニューアトランティス』誌の誌面ではよくあることなのだが——この問題に関しては見解を十分明確にしていない。テクノロジーの悪影響についての彼らの説明は、人間が意図的に作るものは文字通りすべて含むほど、ハイデガーのそれと同じくらい徹底しているだろうか？

新保守主義者たちはテクノロジーの危険性を訴えるが、有害なテクノロジーと人間の尊厳を脅かさないテクノロジーの違いを見分ける基準を示すことはない。テクノロジー的態度は幹細胞研究で終わるものではなく、自動車やワクチン、そして事実上、現代の生活全般にも存在している。反テクノロジー的な姿勢は、最初は魅惑的に見えるが、つまるところ行き過ぎである。

新保守主義の著作物には、反テクノロジー的な立場と、紛れもないテクノロジーの恩恵

の間でのこうした緊張関係がにじみ出ている。コーエンは過剰なテクノロジーに問題の焦点を再び合わせようとする。「我々の使命と我々の時代は、テクノロジーの状況に直面することと不可分である。それを味わい、擁護し、改善すると同時に、その問題に対処し、超越し、抑制しなければならない」(Cohen 2003, 7)。けれどもこの立場は、問題なのは全体としてのテクノロジー的態度であり、単にテクノロジーの特定の側面ではないという彼の見解と緊張関係にある。それに対してカスは、「未来のテクノロジーによって実現されるのを待たなければならないような満たされていない人間の深い願望というものはもはや存在しない…。我々は満ち足りて生活するのに必要なもの以上をすでに得ている」と書き、彼の根底的な哲学の含意をより十全に受け入れているように見える(Kass 2006, 15)。

ハイデガー的な批判はまた、新保守主義のより大きなプロジェクトに対しても問題を提起する。ハイデガーにとっては、いかなる思想体系も全体的な真理を主張することはできない。固定的な人間性に由来する超越的な道徳的真理の存在を新保守主義は信じているが、それはテクノロジー的世界観と同様、完全な真理ではない。実際、多くのポストモダニストがハイデガーを使い、とりわけ文化的・道徳的規範の主観性に焦点を合わせることで、絶対的諸価値や絶対的意味に反論してきたのである。

さらに皮肉なこととしては、シカゴ大学(イリノイ州シカゴ)の教授であったレオ・シュトラウス(Leo Strauss)は、カスや新保守主義の運動に対して主要な思想的影響力のあった人物であるが(Vogel 2006)、絶対的な道徳はないというポストモダンの感情を生んだとしてハイデガーを非難していた。そうした感情をカスは現代社会における問題の多くの原因として挙げている。しかし、新保守主義者たちは、ハイデガーの批判的な視線を自らの包括的な道徳に向けたり、彼ら自身が同様の理由でそうした道徳をテクノロジーと同程度に危険なもののみなすべきか問うたりすることは決してない。

進歩主義者たちの不養生

自らの思想的伝統を受け入れず、あるいは理解しないことで、新保守主義者たちはバイオテクノロジーに対して混乱した態度をとり続けている。彼らは商品化や疎外に対して深い懸念を表明するが、結果的に誤用へつながる資本主義の構造を論じない。彼らは、ときには資本主義の筋金入りの支持者であり、またあるときには「市民の道徳に最も配慮する保守主義者は、しばしば現代資本主義の欠陥に対する非常に鋭い批判者である」(Cohen 2006b, 45)と主張するかもしれない。

新保守主義者たちにとって、資本主義が解き放つ強大な社会的・経済的力は、ある種の伝統的な道徳の規準によって抑えられるべきである。しかし、新保守主義の言述の多くには深い悲しみが感じ取れる。まるで、最終的には経済的圧力によって、彼らが諸価値の中で最も人間的とみなすものに反する行動を人々がとるように促されることに気づいているかのようなのである。将来に待ち受けることについてしばしば不機嫌に感じるのが避けられないようであり、それは真の資本主義者の希望に満ちた野心と著しく対照的である。

新保守主義の旗艦雑誌『ニューアトランティス』創刊号で、コーエンは新保守主義の課題を次のように表明した。「現代社会のあり方に対する我々の依存、現代社会のあり方の欠陥、そして他の可能なあり方に対する現代社会のあり方の優位性、過去に対する現代社会

のあり方の優位性に我々は取り組む必要があるだろう」(Cohen 2003, 8)。不幸にも、自らの思想的起源を忘却していることは、新保守主義のバイオテクノロジー批判が哲学の袋小路に入り込むのを助長してきた。

それでも進歩主義者たち(**progressives**)は勝ち誇る立場にはない。イデオロギー左派によるバイオテクノロジー批判には固有の難点がある。一つには、根深く、かつほとんど知られていない違いが左派の内部にある。それは、1)科学的表現についてはよりリベタリアン的であり、科学者に自己統治の前提を認めようとする者、2)政治的にはより「グリーン」であり、潜在的に危険な科学に先んじて予防原則を課そうとする者、3)人類を根本的に変化させるためにバイオテクノロジーによるエンハンスメントを意図的に応用し、進化の過程に人間が効果的に介入できるようにしようとするトランスヒューマニストを自認する者、の間にある相違である(Garreau 2005)。これら三つの方向性のうち、第二のものが科学に対して最も多くの規制を課そうとし、第三のものは規制を最も少なくとどめようとする。

最初の立場は、米国におけるバイオテクノロジーに対する進歩主義の見解の主流であり、しばしば学会でみられる専門家による生命倫理学であるとみなされる。フクヤマはこのグループを「寄せ集め」とであると述べている。生命倫理学の専門家たちは有益な問いを提起してきたと彼は言うのだが、「何であれ科学者の共同体のしたいことを手の込んだやり方で(そして詭弁を弄することで)正当化するに過ぎない者」と言う(Fukuyama 2002b, 204)。こうした評価の是非はともかく、また確かにフクヤマはこのような判断を下す唯一の著名な学者ではないが(Evans 2002)、やはり認めざるをえないのは、左派の立場でバイオテクノロジーを生命倫理学的に「正当化する者」は、科学的知が他のあらゆる種類の知に対して基本的な意味において特権的であるとみなす哲学的伝統の末裔だということである。

そのような科学を重視する哲学者の伝統には、論理実証主義者と、特にジョン・デューイ(John Dewey)のような米国のプラグマティズム主義者の双方が含まれる。これらの思想家たちは、ハイデガーらの実存主義を含め、形而上学というのはせいぜいのところ希望のない蒙昧主義(**obscurantism**)であり、最悪の場合は出来の悪い詩にすぎないとみなすりベラルヒューマニストであった。彼らの多くは20世紀半ばに欧州の全体主義的体制から逃れてきた反体制派であった。彼らはマルクス主義とファシズムの両方を、ヘーゲルからハイデガーに至る反科学的思考と哲学的蒙昧主義の伝統の産物とみなした。彼らの理解によると、科学とは他に類のない仕方で自らを修正する世界認識の方法であり、すなわち純然たるテクノロジーの成功を通して他の形態の知に対する認識論的優位性を繰り返して示してきた方法である。

それにもかかわらず、進歩主義者たちにはカス(1993)によって表明された批判が当てはまる。それは、応用科学のあらゆる望ましくない影響をテクノロジーのアセスメント(評価)と規制が管理する能力を進歩主義者たちが過大評価しているという批判である。テクノロジーは単に道具的なものであり、それ自体は価値中立的であるとする実証主義的な見解を採用する進歩主義者もいるが、そのような立場は水素爆弾を扱うことが難しい立場である。バイオテクノロジーに対する進歩主義の見解は、デューイの経験的自然主義を再考すべきであろう。デューイの経験的自然主義においてテクノロジーアセスメント(技術評

価)は、新たなテクノロジーの意図されない影響が見極められ、望ましくない結果を最小化するために新たな手段が用いられる実験的なプロセスであると理解される(Hickman 1990)。テクノロジーは価値中立的ではない。テクノロジーの変遷を監視することで我々の諸価値は出現し進展する。場合によっては、我々が正確には何を実際に評価し、またそれをどの程度評価しているのか、それが脅威にさらされるまで気づきさえしないこともあるかもしれない。エコロジー運動は最近のそうした一例である。

テクノロジーのアセスメントと規制は静的なものではなく、むしろ情報を得てそれに従って応答するという双方向的なプロセスである。1995年に米国議会技術評価局(Office of Technology Assessment)が政治的動機によって廃止された事例で示されているように、テクノロジーアセスメントの価値が理解されていないことにより合理的な公共政策決定に空白が生じた(Hickman 1998)。それでも、非政府のナショナルアカデミーズ(ワシントンDC)のような他の団体は、政治的党派性の風向きの変化にそれほど直接的には結び付けられていないので、そうした空白をある程度補うことができていた。いずれにせよ、農耕以前の社会へ戻ることに以外に、テクノロジーのアセスメントと規制に対する代替案がどのようなものでありうるのか明確ではない。

しかしこうしたことはいずれも、[上掲の左派内部における三つの方向性のうち]「グリーン」およびトランスヒューマニストの方向性に対して、バイオテクノロジーに対する進歩主義の見解の主流であると我々が呼んだものを前提している。これまで新保守主義者たちは、彼らの哲学的ルーツがマルクスの政治経済学とハイデガーの神秘主義的存在論にあると認めてそれを擁護することを怠ってきた。そのように、進歩主義者たちは、新保守主義のバイオテクノロジー批判に対する活力を取り戻した建設的な応答について今後より明確に議論していく必要がある。

(訳：加藤 穰)

【付記】本稿はJonathan D. Moreno, Sam Berger, “Biotechnology and the New Right: Neoconservatism's Red Menace.” *The American Journal of Bioethics*. Volume 7, Issue 10, 2007:7-13の全文訳である。著者の所属先として記載されている米国進歩センター

(Center for American Progress)は、ワシントンDCに本部を置く民主党系のシンクタンクである。共著者のうちモレノ氏は米国ペンシルベニア大学教授(医療倫理学・科学史および科学社会学)であり、邦訳された*Mind Wars: Brain Research And National Defense*(『マインド・ウォーズ 操作される脳』久保田競監訳、西尾香苗訳)を含め多数の著書がある。バーガー氏は米国進歩センターに研究員として所属した後、イェール大学ロースクールを修了した。現在はHeyman Federal Public Service Fellowであり、公民権、市民的自由、進歩主義の思想史を主要な関心領域としている。

原文では冒頭の節には見出しがないが、翻訳にあたり「はじめに」という見出しを置いた。原文にはアブストラクトが付されているが、「はじめに」とほぼ完全に同一内容であるため割愛した。また、キーワードが列举されていたが、表題等から明らかであるため、これについても割愛した。訳注以外の訳者による補足は[]内に示した。外国語の固有名詞のカタカナ表記は定着しているものあるいは原文の発音に近いものを可能な限り採用

した。引用文献には英語以外の言語からの翻訳のものもあるが、ほとんどの場合英訳タイトルのみを示してある。

〈参考文献〉

- Cella, P. III. 2005. Technology and the spirit of ownership. *New Atlantis* 9: 55–64.
- Cohen, E. 2002. New genetics, old quandaries: Debating the biotech utopia. *Weekly Standard* 7(41). Available at:
<http://www.weeklystandard.com/Content/Public/Articles/000/000/001/132jmnjg.asp?pg=1> (accessed July 30, 2007).
- Cohen, E. 2003. The new politics of technology. *New Atlantis* 1: 3–8.
- Cohen, E. 2006a. Biotechnology and the spirit of capitalism. *New Atlantis* 12: 9–23.
- Cohen, E. 2006b. Conservative bioethics and the search for wisdom. *Hastings Center Report* 36(1): 44–56.
- Cohen, E. and W. Kristol. 2002. Cloning, stem cells, and beyond. In *The Future is Now*, ed. E. Cohen and W. Kristol, 297–305. New York, NY: Rowman and Littlefield.
- Dickenson, D. 2002. Commodification of human tissue: Implications for feminist and development ethics. *Developing World Bioethics* 2: 55–63.
- Evans, J. 2002. *Playing God? Human genetic engineering and the rationalization of public bioethical debate*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Freud, S. 1930 [1989]. *Civilization and its discontents*, ed P. Gay, 5–112. New York, N.Y.: W. W. Norton and Company.
- Fukuyama, F. 2002a. A milestone in the conquest of nature. In *The future is now*, ed. E. Cohen and W. Kristol, 77–80. New York, NY: Rowman and Littlefield.
- Fukuyama, F. 2002b. *Our posthuman future: Consequences of the biotechnology revolution*. New York, NY: Farrar, Straus and Giroux.
- Garreau, J. 2005. *Radical Evolution*. New York, NY: Doubleday Press.
- Heidegger, M. 1954 [1977]. The question concerning technology. In *The Question Concerning Technology and Other Essays*, ed. W. Lovitt, 3–35. New York, NY: Harper Torchbooks.
- Hickman, L. 1990. *John Dewey's pragmatic technology*. Bloomington, IN: Indiana University Press.
- Hickman, L. 1998. Four effects of technology. *Philosophy and Technology* 3 (4): 59–67.
- Himmelfarb, G. 2002. Two cheers (or maybe just one) for progress. In *The future is now*, ed. E. Cohen and W. Kristol, 73–76. New York, NY: Rowman and Littlefield.
- Kass, L. 1971. The new biology: What price of relieving man's estate? *Science* 174(4011): 779–788.
- Kass, L. 1992. Organs for sale? *The Public Interest* 107: 65–86.
- Kass, L. 1993. The problem of technology. In *Technology in the Western political tradition*, ed. A. Melzer, J. Weinberger, and M. Richard Zinman, 1–24. Ithaca, NY: Cornell University Press.

- Kass, L. 2002. Preventing a brave new world. In *The Future is Now*, ed. E. Cohen and W. Kristol, 219–241. New York, NY: Rowman and Littlefield.
- Kass, L. 2006. ‘Live’ with Leon Kass. *American Enterprise Online*. July/August 2006: 2–15.
- Keim, B. 2004. Beyond politics - The strange saga of the President’s Council on Bioethics. *GeneWatch* 17(3). Available at: <http://www.genewatch.org/genewatch/articles/17-3keim.html> (accessed July 30, 2007).
- Kristol, I. 1968. Keeping up with ourselves. In *The Yale Review*, Yale University, 509–517. Cambridge, MA: Blackwell.
- Marx, K. 1844 [1967]. Excerpt notes of 1844. In *Writings of the Young Marx on Philosophy and Society*, ed. L. Easton and K. Guddat, 265–282. New York, NY: Doubleday and Company.
- Marx, K. 1859 [1977]. *Contribution to the critique of political economy*. Moscow, RUS: Progress Publishers.
- Marx, K. 1932 [1998]. Economic and philosophical manuscripts. In *The Economic and Philosophical Manuscripts and the Communist Manifesto*, trans. M. Mulligan, 13–170. Amherst, NY: Prometheus Books.
- Marx, K. and F. Engels. 1848 [1978]. The communist manifesto. In *The Marx-Engels Reader*, ed. R. Tucker, 469–500. New York, NY: W.W. Norton and Company.
- President’s Council on Bioethics. 2003. *Beyond therapy: Biotechnology and the pursuit of happiness*. Washington, DC: President’s Council on Bioethics.
- Sharp, L. 2000. The commodification of the body and its parts. *Annual Review of Anthropology* 29: 287–328.
- Tabachnick, D. 2005. The politics and philosophy of anti-science. *Techne: Research in Philosophy and Technology* 9(1). Available at: <http://scholar.lib.vt.edu/ejournals/SPT/v9n1/tabachnick.html> (accessed on July 30, 2007).
- Vogel, L. 2006. Natural law Judaism? The genesis of bioethics in Hans Jonas, Leo Strauss and Leon Kass. *Hastings Center Report* 36(3):32–44.
- Wolfson, A. 2003. Why conservatives care about biotechnology. *New Atlantis* 2: 55–64.

訳注

- 1 マルクス／エンゲルス『共産党宣言』冒頭部分のパロディ。
- 2 杉本俊朗訳『経済学批判』、大月書店、1966年、15頁から該当部分を引用した。
- 3 1941年生まれのアメリカの著名ミュージシャン。
- 4 1976年に結成されたイギリスのパンク・ロックバンド。
- 5 倉持武監訳『治療を超えて ― バイオテクノロジーと幸福の追求大統領生命倫理評議会報告書』、青木書店、2005年、177頁を一部改変。
- 6 原文では Keirn となっているが誤り。名前の発音については本人に確認した。また、原文では「ページ番号なし」とされていたが、本人から直接入手したファイルにはページ番

号が付されているのでこれを示してある。

⁷ 水田洋訳『共産党宣言・共産主義の諸原理』、講談社、2008年、14頁の訳語を用いて訳してある。

⁸ 関口浩訳『技術への問い』、平凡社、2009年、56頁の訳語を利用して引用された英文を訳してある。

⁹ Bestand の英訳。

¹⁰ 発音は本人に確認した。

¹¹ ベルリン封鎖が時代背景にある。

¹² 鈴木淑美訳『人間の終わり ― バイオテクノロジーはなぜ危険か』、ダイヤモンド社、2002年、4頁および上掲関口訳『技術への問い』、46頁を参照して引用された英訳を訳してある。